花田露子嬢

兼ねて御病床に在せしが俄に御重態、昏睡三日に及び給ふ
八月十八日

もの言へば泪こぼれむ目守らするうからが中の清しみ姿
痩せ〳〵て在すを見ればあな尊現身ながら神に通へる

遂に十九日早曉忽焉として逝き給ふ

花田露子まがなしき名を負ひ給ひ君現世にはかなく在せし

薄物に單の帶をしめ給ひけはひもかなし眠らすが如
うつそ身の息は絶えしと北枕ふとも眼(まなこ)をあき給はずや
夏の花はた秋の花み枕に咲きかをれるもいたましきもの
短命に在せし君がやさしさはのこれるものを泣かすものかも
いとけなく在せし日より美しくやさしく君は在り給ひにし
清み靈天にかへらし今日よりは櫻ヶ丘に秋風ぞ吹く

貧

いく年の破れ世帶ぞ借金のなかりしこともかつてありしを
好況來人の儲けし話など耳のけがれと豈きかめやも
貧しきは賑はしきよときくものは盥をたゝく雨もりの音

竹の里人忌　雲水にて

露ながら糸瓜の花を瓶にさす三十年すぎし古人のため

ほと〳〵に今は値打もきまりしと己を嗤ふ糸瓜をさして
在しつる大人が齡をすぎたりし吾と思へど嘘の如しも

即景

萍の一面生ひて池の面に秋の光りのしみ〴〵しもよ
既にして秋のけはひや立ち枯の松のそがひの白雲のいろ
そがひにはつく〳〵しなく木をしげみ立たす達摩を吹く秋の風

ある時

まごゝろの足らぬ吾ぞと思ふ時わきて流るゝ泪とゞまらず

秋さりてうれしきものは父母の佛にまつる白菊の花

秋の空澄みわたれどもこの國に赤色ギヤング現れにけり

となり人鳴かずなりたる山雀を賣らなとぞいふきくがあはれさ

松茸の飯たきし夜をゆくりなく遠人の來てうれしかりけり

明治節

白菊は塵を許さじ露ながらさして思へばかしこや今日は

和歌山行　十一月四日俄に花田先生を訪ふ

うらゝ照る　野末を遠く　秋山の　かすめる見れば　いとけなき

思ひ湧きしが　いつとなく　今のわが身が　妻子らと　泊り重ねて

旅ゆかば　悲しからむ　なげきつゝゐし

ひた走る電車の窓によるべなき夢とうつゝのわが歎きかも

すでに和歌山も近しとおもふ頃

白き道一筋遠し騎馬の兵砂埃立てゝ走りゆく見ゆ

兵を練る秋野はひろし若男らも馬もいさみてよく驅けるらし

海近き低山裾の棚田には案山子を立てゝ食稲(をしね)ゆたけし

まがなしく裾回は海に入る山の雜木紅葉は松の間に照る

聖上陛下行幸　十一月十日

日の丸はいさぎよしとぞ子に言ひて今日の御幸を旗立てにけり

紅葉照る國原驅けて大君の召さすみ車今か着かむぞ

軒並にみ旗かゝげて賤われら街の塲末にかしこみてゐむ

還　御　十一月十七日

大君の還ります日と朝影のあまねき空に月も殘れり

菊

物干に一夜おきしかば露けさのまたあたらしき鉢の白菊

妻の母三十三回忌に

立ちて來る面影さへもなき母を戀ひ思へるらし君が子吾が妻

殘さしゝ君がみどり兒生ひ立ちて今は四人の子の母吾が妻

老いてゐますまゝしき母を疎ずる心はなしも君が子吾が妻

酒

酒のみて亂れぬ程はよしといふかくいふ妻もあきらめにけむ

吾死なば棺は酒の空樽と妻にいひしかば子らの笑ふも

同じくは杉の香ふかき津の國の灘の生酒の一空(あき)の樽

厨邊に菰冠りをば据えて見む吾の願ひは空しかるらし

宵々を親しみ來つゝ二十年今はた酒に吾が別れむや

秋夜

さる酒亭より使來たり、名を告げずし頻りに吾を招く人ありき

酒呑みは酒もて釣ると秋の夜を狐の伴がうちはやしゐむ

この面がさらしものとも思はねば自が名を告げぬ人に逢はめや

わが名をば惜しむに足ると思はねど尙野太皷となりかねてゐる

何をかも生れ在所の夕時雨古里人ときけば寒けし

鉢の菊すがれたれどもなほ捨てかねて

霜枯のまがきの菊に思ひよせ山茶花白きわびしさも見ゆ

四男生る康雄と名づく　十二月十日

梁の塵も舞ひ落ちむ産聲の高きをきけばまさに男の子ぞ

その聲や何を怒れる訴ふる心撲たれて吾立ちすくむ

産湯をばわかす竈の前にして薪がいぶると泪おとせり

昭和八年

越年

かにかくに越えたりしよと言かけて妻をいたはる身は疲れつゝ

おのづから人の歩みのかはりしとすなはち見れば明けづきにけり

父母は疲れてゐると知るべしや早起き出でゝ子らのさわげる

うれしくてたまらぬらしき子を並べ心直ぐなれと言ひてきかする

賀狀

たまはりし賀狀の束をおし頂き壽詞(よごと)を申す吾は書かねば

橿原神宮參拜　一月三日

白妙の玉砂利ひろく敷きならしものゝ影見へず橿原の宮

新春

年あけて事のいやしげく一日だに机の前にすわるひまなき

展墓

奥津城の松に風吹かずかを〳〵と烏がなきて曇りふかしも

いとけなき孫が掌を合すみそなはせ父よ子を率て今日詣り來し

たてまつる花は樒のかゞみ葉のさぶしき父が面影に見ゆ

凍傷の子

男の子はも泣かぬものぞと夕風にしもやけの子をつれてかへるも

年明けてすでに六才ぞとはげませば凍傷の手に泪はらひぬ

塔本山房

閑庭にいまだ苔むさず山房の春淺くしてむしろすがしき

雜學の博士と言はむ來て見ればこの山房のうづたかき書

病み て

枕邊に釜をかけさせ寢ながらにきゝてなぐさむ松風の音
山の入りふかきに起り峰さして消ゆる松風思ひさびしむ
松風の消えゆく聲は何やらむものゝ戀ほしく泪こぼれつ
病む父を氣づかふをさな自が持てる二つの飴を一つ吳れにき
はしけやし君がたまもの飴一つ舌にふくみて父は癒えむぞ

子らが寢顏を見つゝ

疊かず狸がものゝ半分(なから)にも及ばぬ室に子と四人寢る
つくゞくと見まじきものは夜の更けを灯影に並ぶ子らが寢顏ぞ
上の子の性(さが)は誰に似る叱られてすぐに泪のたまるその性は
言ふことのつねにさかしき仲の子のこの痩形も誰にかも似し
添ひ臥しの母を次ぎにゆづり父とねて父が睪丸(ふぐり)を踏みたゝく子よ

武庫短歌會　兼題「草」　二月二十六日

益良雄が醜のあら草刈りそけてわが滿洲に春は來向ふ

庭の邊の空しき鉢に草の芽のもゆるを見れば春近づきぬ

紀念撮影

拜殿をそがひに立ちてよからぬもよきも交りて面二十ばかり

面並めてうつし繪寫す面々をつら〳〵と見む後の日のため

歌會後三宮時雨茶屋といふに晩餐を共にす

四の宮のまかり路をあはれうち連れてこの盛り場の三の宮に來し

二十年をかへりみ思へば若男吾を戀ひなきし子の住みしこのあたり

おもひ出に心もぬれてわがどちと今宵を酌むは時雨茶屋かも

うま酒もうしほ鹽燒きつくり身と肴もよけれこの友ぞよき

いさゝかは醉ひたるらしと思ひつゝ吾先生に管まきにけり

一夜妓樓に伴はる

床の瓶に櫻と椿咲きをゝり疊のひろく大机一つ
春の夜をかゝるところへ伴はれほぐれぬ心誰知るべしや
窓の外の新聞工場に目をやりて前に唄へる妓を忘れゐし
レコードに疊をすべり踊る妓は思ひ出さねどかつて見し顏
借り猫のすべなさにゐて酌む酒のうまからめやも鹽豆を嚙み

疳

世の人は面と向きては罵らずあちら向きては出す舌の色
甲斐もなく疳にさわるは世の人の腹黑くして舌の色赤き
この頃は疳のたかぶりゐる吾と知れるものから妻のさはらぬ
かにかくと世に交はりてあり經つゝある日は疳の立ちもこそすれ
すべもなく疳の立つ日に届きたる文は讀までもよき文の如

春

人滿つる巷に住みておもほへば春のさかりはあはれなりけり

埃浮く巷の畫をあなうしやラヂヲが叫ぶ經濟市況

この國に三日の花咲く春といふにおもへば暗し人もこの世も

闇の夜によぎりし人の古里の思ひ出さへもすでに古りにし

燒きすてゝ年は經ぬれどまさやかに尙し目にありその筆のあと

五條の宮　四月九日

明治大帝のみ歌かゝげて淸床に据りゆたけし大なり瓢

落ち椿一つ二つは白砂の齋庭の雨にぬれて閑けき

友に

世の波の荒波かつぎ息づかむ暇さへなしに歌よまぬらし

ましぐらに行くをし見れば信吉よ歌の如きは詠まずともよし

父　母

父母の戀しきときは香たきて深夜を居ればうつゝともなし
この頃は忘れまつりて在り經しと位牌の前に額づきてゐる
溫州義良信士雪巖妙白信女わが父母のみ佛の名は
生きの世に忘れてならぬ父母を何にかまけて忘れわがゐし
父母の佛の前にほろ〳〵と涙こぼるゝさ夜のくだちを

父母に不孝をせしと思はねど佛の前に泪こぼるゝ
吾がひとり今宵たうべし鯛の身は母の佛も好み給ひし
國遠く人のたばりし茶をいれて父の佛に泪こぼるゝ
のこさしゝ八人の子らが身の上を佛に告げて泪こぼるゝ
何事も知りて在さむ父母の佛と居りて一夜ねむらず

楠公誕生地吟行　五月十四日

富田林

古びたる町の家並は軒ひくし牛車行き合ひて道を阻める

二上山

前山の若葉が上に二上はかすめる空に溶け入らむとす

眼交の二上山や口吟む遠代の歌はまがなしき歌

道の邊

くろ〳〵し五月の畑の畝隣り豌豆の花と蠶豆の花

若男さび莖立ち太き蠶豆にやさしきものか豌豆の花は

歩み來て汗ふきながら佇めば篁にわく初蟬の聲

うち並び金剛葛城そびゆればこの山川の水のさやけさ

山川の石をまさぐる男あり鰻釣るとぞこの山川に

桐の花

久しくて見つるものよとすぎがてに仰ぎても見つ桐の木の花

生國はいづれの吾ぞ忘れゐしはかな心よ桐の木の花

現身がかなしきかもよ山峽の草屋の軒に咲く桐の花

楠公誕生地

多聞丸生れ給ひし跡どころ丘のなだりのあら草のはな

大木の楠も若葉よめぐらせる垣のかなめも紅にもえつゝ

ものゝ夫の心はたかし仰ぎ見る城あとどころ只青葉山

仰ぎ見る城跡どころ若葉して一の城戸(きど)とぞ松うそぶける

攻め寄す敵の軍勢を目かげしてうち見給ひし君が偲ばゆ

風になびく非理法權天の旗じるし君を偲べば今も見る如

穂に出でゝ麥の棚田はめざましき若葉の山の裾につゞけり

楠公産湯の井

崖の下篁かげに標(しめ)はりて湧く井の水は清くありけり

途上

谷水を屋敷にひきて水車かたりことりと間ををきて搗く

建水別神社

葛城の麓にいつき祀られて齋庭の杉も年古りにけり

加藤茂氏　三十年の教職を退き給ひしに

益良雄や庭の牡丹のおごれるを今年の春はながめくらしつ

昂ぶりてもの思ふ君と思はねど牡丹の花はくづれやすきを

物干園藝

物干に鉢を並べて培ふは夏よ咲きつぎ秋に至る花

つまぐれと葵朝顔日和草並ぶ素燒の鉢十ばかり

去年の秋人のたびたる菊の芽の挿し芽は枯らし空し鉢かも

夏の日にしなへやすきをつまぐれの夕の水に甦るあはれ

花咲きて紅もよけれど朝顔はあしたさやけき白花ぞよき

干物の浴衣の裾のうちふれて萩が瑞枝の花をこぼしぬ

生田遊龜麿氏を憶ふ

事務上の話はすみぬくつろぎて閑談せなと言ひし君はも

無弦坊君は何才(いくつ)に在すぞと笑みて見給ひぬ吾の頭(つむり)を

鎌倉の代の古きも交り百あまり並ぶ皷を見しめ給ひぬ

晝と夜

夏枯の賣食ひ時をたま〳〵の客を逃して汗ふきにけり

値切られて賣り損(そこ)ねたる薄物をたゝむとすれば汗の垂り來る

狹ければ蚊屋のたるみもむし暑く寢あづる子らを庇ひつゝ居り

のたうちて眠れる見ればこの夜頃幼き夢も安からじかも

晦日と朔日

この月は待ち給へよと言ふことは慣れても苦し月の晦日は
朔日は松も榊もとりかへて朝は清しも拍手をうち

愚

四十路既に半ばに近く省みていまだ幼き吾の如しも

わが父の四十路の頃を思ほへば夢も及ばぬわが愚かしさ

妻は

わが妻は一人を呼ぶと子らが名のことゞ呼びて己笑へる

五條の宮にて　驟雨至る　七月九日

ゆれなびく夾竹桃の赤ければ雨のけはひを見つゝし待つも
忽ちに降り來し雨に聲あげて走る子供は喜べるらし

頭をば雨に叩かせ出で走る子供のさまを見れば笑ましも

梧桐の葉をうつ音のほと〳〵に待ちて久しきこのにはか雨

にはか雨たちまちやみしあつけなさ街のとよみの耳に立ち來る

鈴虫を貰ふ

鈴虫は何にぞ飼はむ素枯れたるつまぐれ拔きて素燒の鉢に

鈴虫が昨宵は泣きしといふ妻よふかく眠りてゐしと思ふに

靜かに居らば鳴かむと鈴虫の聲をまちつゝ子らは眠りし

鈴虫はいとけなけれどなき初めて咲きいそぐなり朝顏のはな

悼大山龍二郎氏

これの世のものゝ道理はわきまへて多くは言はず行ひし君

過去に悔はなからめ老い給ふ母を或は君がなげきし

堪ふべきは堪へて來しよといふ顏ぞ白布をとりてをろがむ顏は

沙魚釣り

夕潮に寄ると寄らずと淀川の岸邊に沙魚を待ちて日暮れし
淀川の芦生が中に夕影のうごくと見れば潮みちて來し
沙魚釣ると河豚の子を釣りかへりみて笑ふ友なし夕潮河岸に

何ぞこの頃の唄の亡國的なる
雲の行けはしき時を若男らがこの頃唄ふ聲のかなしさ

素破といはゞ征くは曠野か荒海か雄叫び立たむ若男が唄は

オールバツクは斷髪の婦女と似たり
オールバツク額にかゝるを指もてかきあぐるなり女の子さびして
オールバツクの若男の伴はとり押へ月代剃りて髷を結はさむ

たはむれに吾の禿頭を罵るに酬ゆ
塵塚に霜おきたらむ頭はやある夜寒しと石女は泣く

無沙汰をしてゐる人々

筆とりて人に答へむおちつきと暇もたぬを憐み給へ

竹の里人忌　五條宮にて

今にして己如きが先生を慕ひまつるといふがかなしさ
年毎に己の愚をば省みる心すべなし今日の忌に逢ひ
先生の大き命にふるらくは生れ更りて後の日の吾か

伏見にて

堀割を遊女屋の裏行きめぐり心さむしも網船に居り
益良夫の有馬新七弔ふと時雨にぬれぬわれのこゝろも
寺田屋と軒行燈に讀みてしが今も世相の憤ろしも
おのづからわが目もぬれて時雨るゝや淀の川波山城の山
淀の瀬に網をぞうちて騙し打ち見れば魚（さかな）の子供ばかりを

急患にて再び令閨を失ひし谷野兄を思ひつゝ

常ものにこだはらぬ君と思へどもこたびばかりは呆けて在さむ

たらちねの母を喚び泣く子を抱きてある夜はさすが君もなかむぞ

生業に朝は小暗く起き出づる父が胸べに子は泣くらむぞ

老い母のまたも憂き目を見給ふよ勿體なけれど世の逆さ事

昨日今日俄に寒し幼子の着るものにさへ心配らむ

花田先生にものを訊く會　十一月十九日

秋の日の短きものを先生に訊きたきことの豈つきめやも

先生にきゝたきことの尙ありて夕づくけはひあかり戸に見つ

師走

子餓鬼らが母に叱られ泣くなべに師走日昏れは吾もかなしよ

つかれゐて鬼もわらへと書く賀狀うき世の義理と書くべかりけり

皇太子殿下御誕生　十二月廿三日

非常時日本何ぞ憂へむかしこしや日嗣の皇子を神は下しき

今朝の空東の空を伏し拜み拍手うちて泪あぶれつ

市人は皇子天降(あも)らしの喜びの外は言はずも今日を佳き日と

今朝の空一天晴れておぎろなし人のいさみぞ地にみなぎれる

さしなみの軒のみ旗に雀子も冬日を浴びてよろこべる如

昭和九年

公會堂囑目

曇り日をさつと西日のさし照りて府廳の白堊かゞやきて見ゆ

控訴院の塔の背向の棚雲のうごくとも見えず形うつろふ

武庫短歌會　松波邸にて

楣間に山陽の扁額あり

古人の書かしゝものと仰ぎ見て頸根はたゆし讀みがてぬものを

讀み得ねど字句の意を探りて

たらちねの母に從ひ妻子率て春野を行かば吾は泣かむぞ

はしけやしわが妻は子はわが母をわが垂乳根の母を知らずも

古人が瓢に添へて書かしたる文字はかなしも瓢笑ましも

靜寂を破るもの

歌を思ふ室の靜寂を鳴く犬の聲は幼し家の子思ほゆ

更に尺八の遠音のきこゆ

きゝ入りて寒夜鈴慕と思ふ時ほと〳〵吾のかなしくなりぬ

墨の香も寒夜はうすし佳き人の歌をかゝすと磨り給へども

皇太子殿下御降誕奉祝踊り

天降(あも)らしの皇子をたゝへて市人と二夜踊りてわが聲嗄れぬ
うち囃し勇み踊れるおどり子の手振りゆたかに街をねりゆく
日の皇子をたゝへまつると宵の灯に踊り渦巻きわきかへる聲

紀南の大山火事

山の火は已燃えつゝ雨を呼ぶ早見そなはせ八大龍王

親子猪

親子猪み冬の山にありかねて人里近くうたるゝあはれ
冬ふかみ山に餌をなみけだものも子を連れてこそ飢の早けむ
庇ひつゝ仔猪をうたれ逃げあへぬけだものすらも親はあはれや
けだものゝ猪も子連れはうたれやすしわが世の様に似じと言はめや

畝傍飛鳥吟行

畝傍御陵

御垣内小鳥なき交しみ濠には鳩ぞ群れあそぶ春の日をよみ

橿原神宮

陽炎のもゆる齋庭の玉砂利に下座して仰ぐかしはらの宮

御棟の眞一文字の背向にし松の瑞秀ぞ空さしてならぶ

思ひきや宮のまかり路目に遠く金剛葛城雪はだらなる

久米寺

古寺の山門數歩横たはる電車の軌道憤ほろしき

古人の空海阿闍梨しぬびつゝ歩むみ寺は荒れにけるかも

岡寺

淨嚴の思ふべきなしこの庭のすぎし白梅紙屑に似る

島の庄

古塚を堀りて發きて天日に曝せる見ればあはれ古國

山腹の村のたゝずまひなづかしよ裏は松山青空の下

白壁の倉のかたへに竹植ゑて住むも一代ぞこの短か世に

橘寺

厩戸の皇子に蓮華の降りしとふ佛地しんとして夕日の中に

はからず野を行く葬列を見る

入りつ陽に映ゆる素幡鉦うちて葬りの列うちつゞく見ゆ

川原寺趾

眼に描く遠代はるけし苔むして殘る以思須惠二十まり六つ

同行の成瀬女史頻りに夕空の美をいふ

乳色にうるむ夕空見る眸のかなしきことはわが言はざらむ

晝酒

人のゆく花見は行かず家ごもりたま〳〵ひとり晝を酌む酒

妻さへや見て見ぬふりの晝酒のさぶしきを酌みてひとり吾が居り

賜物の海苔をあぶれば海苔の香も春はなづかし春磯の香と

嚙みしめて久しぶりぞと酢のもの〻荒磯(ありそ)の鮑まがなしくこそ

ゆさぶらひ酒うちこぼす膝の子を母にゆかしめてすでに醉ひにし

永らへて何がのこると晝酒にほの〴〵醉ひて痴愚にかへるも

あなうるさとなりのラヂヲ壁ごしに小賢しげなる女人の聲は

ある母に

ふる雨に身はぬれながら若草の伸びを目守(まも)らす子育地藏

○

風狂のこゝろ湧く日をちまた路に菜種のはなをわが買ひにけり

長安寺庭前即景

庭隈の日影をうとみ直立ちて芭蕉の卷葉いまだほぐれず

柿の木の芽は角ぐみて畫庭に影のおもしろ描けるが如

塀を越して裏の長屋の屋根の上を柳なびくに猫の眠れる

裸木の曲もなけれど空さして銀杏若木のみづ〳〵しさは

咲き切りて櫻二本散りも初めず庭面あかるし惜しみつゝ見る

花に佇てば顏見知り人吾にいふ世に憂ひなき君の如しと

美しき花の咲く日を何すれば暇のありて金のなしとふ

春の日を金なしの子が言ふ咎は世相は知らず花にあらめや

常の如さわぐ雀と思へども花の咲く日は吾もうれしゑ

咲く花の櫻に並ぶ松の枝あはれと見れば蕊の立ちたる

庫裡の窓花にあかるくお針子のその妙齡の顏ならぶ見ゆ

うなかぶし針はこびつゝ默居りて丹の頰の子らが思へるは何

雀下りてあそべるあたり葉雞頭の燃えてありしを陽炎のたつ

咲く花の櫻ばかりはいづべにて見てもよろしと思ひつゝ見る

扉をあけて阿彌陀如來もみそなはせ浮世の春の花のさかりを

平井圭三郎氏　轉任歸阪　十年振なり

瓜二つ一男一女膝のべに君父さびて吾を驚かす

東郷元帥薨去

東郷元帥逝かしつるぞと子に言ひて眼底あつく號外を讀む

この國に君生れましゝさきはひをかへりみ思へばゆゝしかりけり

この國の青葉も暗くなりゆくよ五月逝かむとして君神去りぬ

幽界と世は隔つれど元帥は永久に死なさぬ偉き人かも

四方の海あらびて波のさわ立つを守らせ給へ偉きみ靈は

臨南寺

若葉して老木の椎のかげふかしどの枝にかも鳥のふくみ聲

風吹けばなびく篁竹の秀のうごくを見れば波の秀のごと

禪堂の草屋根しとゞぬれそぼち或は遠く鳴るはたゝ神

小暗きをぬれ渡りたる竹林のふかきに走る稻妻あはれ

ふる雨にしとゞ打たれて瑞萩のしほるゝさまは幼子の如

淀川にて釣りたりとて二尺に近き鯉を貫ひて

あな見事二番盥に尾を曲げて身じろぎもせぬ眞鯉の魚は

鱗はや黄金燻しの底光りまこと下賤のうろくづならず

と詠みてせてはふらむ心もなし更に他におくる

乳足りて妻もあるものを幼兒の男の子育てゝ豈はふり得む

あなあはれまた貰はれてゆく鯉かよしなきものを人の吳れたる

七日月

ぬば玉のくらき夜空の七日月巷に見つゝ花の苗買ふ

今年は税額一躍五倍に近し

國家非常時さもあらばあれわが子らの小倉の服も荒栲の服

子供らを飢え死なさずは足るとせむ今は厨に酒の香もせぬ

かにかくに生活(くらし)の足りてそこばくの貢はかるを何かなげかむ

だ　り　や

物干の木箱に伸びてだありやのふゝむ蕾は青玉の如

青玉のほぐれて咲かむ色や何もゆる紅(あけ)かも清(すが)し白かも

だありやの咲かむ日をまち父母の佛に切らなこの初花は

神戸原田神社

南風(まぜ)吹けば屋根よころがり庭の面に霰ふるなし黐(もち)の花ちる

某家に招かる　七月廿一日

勿體なや吾を裸形に居らしめて涼しき室に酒をたばりぬ

梧桐の若木の梢のなびかへば土用の風も涼しかりけり

主の君吾の相貌僧の如しといふに

なまぐさのたぐひを出でぬ僧形か迷悟を知らず在り佗ぶる身は

妻の君は緇衣にあらぬをわが衣のほころびたるを縫はし給ひぬ

庭隈に虫なくきけば思ひ出てたぬしかるべき夜は更けにけり

かゝる夜にまたいつ逢はむ膝の上の樂の茶碗を惜しみつゝ持つ

勝尾寺歌會　八月十二日

この寺の布置のよろしさふところを南にひらく山の入處に

松山のそがひの雲の白雲のうごくともせず蟬時雨かも

蟬時雨はたとやみしを松山にこもりなくらし頰白のこゑ

夏山の葉山茂山一ところゆれつゝ赤しさるすべりの花

風鐸も軒も柱もさびぐ〳〵て山のみ寺は晝森閑と

山門の屋根に入り陽ののこる頃聲すみ透りかな〳〵のなく

應頂閣廣き疊にあぐらゐて暑きに居らむ家の子思ほゆ

夜のほどろ目覺めてきけば鐘の聲身に覺えなき罪もある如

朝づけば佛の山に喚び交す世にうつくしき朝鳥のこゑ

秋立つ頃

西瓜割きて幼きものを呼びあつめむさぼらせつゝ見ればたのしき

夏やせのひとり目に立つこの子には何を喰はせむ朝顔の花

竹の里人忌

今日の忌に何をよすがと逢ひ得べき吾と吾が愚をうち嗤ひつゝ

秋風は今日より吹くと身にしめて大人を偲べば晝をなく虫

弟住太郎急逝す　九月十六日

手握りて尙體溫のありといへど既に絶えたり出で入る息は
せぐり來て泪ぞ走る兄吾に言ひたかりし事もありけむものを
聲あげて泣くは幼子聲のみて只咽びなくはその子の母ぞ
北枕その安げなる死に顏よ吾の心は憤りに近し
三十七年その生涯はあはれ〳〵苦勞ばかりをして過しつる

西伯利亞の野に戰ひし面影のありといはむやこの死に顏に
益良雄の陸軍騎兵軍曹も古道具屋となりて死ににき
現身の命死にする戰に生き還り來し今日死ぬるべく
汝が逝きて殘る四人の幼子は吾が飢ゆるともはぐみやらむぞ
泣きつかれ枕並べて眠る子の四人を見れば心せき來る
佛の前般若心經誦し居りつゝ吾やあやふく咽ばむとする

颱風　九月廿一日

たゞならぬ今朝の風ぞと思ふまに吹きつのり來て荒びにあらぶ
紙屑の散るさながらにひら〳〵と屋根の瓦の舞ひ行くが見ゆ
見る〳〵に破れし戸障子われ瓦看板も落ちて路上にあへぐ
學校にやりし子供は思へども外に出でゆかむすべもなきもの
どつと來る風のかたまりゆら〳〵と家のゆらぐに立ちつ座りつ

この家も或は崩えむ子よ妻よ死なば諸共とかたまりてゐる
ことゞく算を亂して地の上のもの〻限りは打ち碎かれむ

この颱風に産を失ひ命を失ひしもの數知れず

目に見えぬ荒ぶる神の前にしてかそかなるかも人の命は

二十三日は明月なり

何事のありしとばかり荒凉の月すみわたる今宵さむけし

偕樂園即詠　十月十四日

しみ〴〵と葭の高穂のなびかへばこらへかねてはなく鵙のこゑ

庭隈に芙蓉の花の咲きのこりなげくに似たり荒れにけらしも

古池は葭と蓮（はちす）のうち亂れこの荒れ様も秋もふかしも

主人島田氏に示す

古池の葭は刈りそけ簀に編ませ蓮は根をほり饗（あへ）とし給へ

そかはかとなく

在りの世に父が持たしゝ竹杖のその古杖は見つゝなづかし

古杖にあななづかしき面影や秋日を浴みて父の來ますも

父母とこの世の逢ひはわがひとり戀ひつゝあれば立ち來る面影

面影の父と母とにもの言ひてひとりある時泪こぼるゝ

父母の佛にまつる花は何秋のさかりの白菊のはな

父母の好ましゝ如吾さへに二つなき花しら菊の花

白菊は霜のまがきに見るべしと思へば吾に古里はなき

白菊や今年の秋はつく〴〵とものの思ふとき泪こぼるゝ

貧しきが豈不遇ぞと思はむや畑の隈の白菊のはな

市場通ひの女房も買へや道の邊に嫗(おうな)がひさぐ白菊のはな

道の邊に嫗ぞなげく値切られて一株五錢白菊のはな

山原

風落ちて山原廣し雲の影一つうごかぬ枯しもと原

山原をいづべへ通ふ道ならむ遠くつゞける見れば思ほゆ

山原のそぎへの雲のさぶしさは動くともなくうつろひにけり

佇ちなげく身にこそかげれ秋の雲この山原にわがひとりゐる

岡本大無大人を訪ふ

大阪の晴を出で來て思ひきや京の時雨に肘(ひぢ)かゝげゆく

小山大野町四十五番はいづらぞと問ふもけうとくわが探しゆく

母なしの病む子を守り住む人の門邊に庭に塵一つなし

揚げ板をかたりことりと炭取りに炭注がすさへ鰥夫さびして

愛し子のそのとしごろの子を病ませ看護し給ふ鰥夫さびして

朝光

あかときの東の空ふし拜み瞼(まなぶた)あつしこの頃吾は

大御祖神々在すこの國と吾朝かげに額垂れて泣く

朝光に拍手うちてひきしまる心おもへばみ冬づきしか

磐石の微塵うごかぬ雄心の戀ほしきかもよみ冬づく空

大晦日來

かもかくも月の晦日は過ぎ來つれ何とすべけむこの大晦日

或るものはうるほへりとふインフレの景氣は吾にかゝはらぬらし

思ほへば千にも足らぬ端金吾にはなしもそのはした金

富人が鼻糞程の金故に命も細る思ひぞわがする

年の瀬にものゝあはれは首なしに似ると人のいふ金なしにして

卷末記

本書刊行にあたり、過褒身に過ぎる序文を賜つた花田比露思先生並に激勵援助を賜つたあけび同人諸氏に、深甚の感謝を捧げる。

抑々私の歌の發生は大正の初年に於て、花田比露思先生及び、武庫短歌會同人諸賢の恩惠に因るもの。爾來二十有余年、風雨霜雪幾變轉の身を、歌に繫がる所緣の故に、或は勵まし或は叱ひ渝るなき溫情を頂いて今日に至つた。思へば短かくもまた長い年月であつた。

本書には大正六年二十七歳より昭和九年四十四歳までの作歌を自選年代順に編み、約一千一百首を採錄した。素より格調いやしく措辭また蕪雜、何等見るべきものありとせぬが、是痴人半生の行路のあと、自ら省みてそこばくの感慨を禁じ得ないものがある。

所詮はこの身と共に滅ぶべき泡沫の歌、一書に纒めて過去一切の亡靈を封じ込み、更に新しき明日への出發をはじめたい念願である。

昭和十年初秋

富坂賢太郎

昭和十年十月五日印刷
昭和十年十月十日發行

定價金壹圓五拾錢

著作兼發行人　富坂賢太郎　大阪市東淀川區十三西ノ町二ノ八九
印刷人　遠藤孝藏　京都市上京區新町通上長者町南入
印刷所　活文舍印刷所　京都市上京區新町通上長者町南入

發行所　あけび發行所　大阪市東淀川區十三西ノ町二ノ八九
富坂方（振替大阪七四四三番）

583
38